

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して(XXXVII)

竹 下 春 日

〔VI〕 5. 墮落した本性 (つづき) — 137, 145, 166, 311(48), 601(41),
702, 714.

(6) La. 137-Br. 407 について。——《邪悪な性質は、自分の方が正しいとなると、思いあがり、自分の正しさをさもきらびやかに見せびらかす。／峻烈さ、すなわち厳しい道を求めて行っても結局、真のさいわいに到達することができず、自然のままに従う道に後戻りしなければならなくなると、こうして後戻りしたということで、邪悪な性質は思いあがる。》(Quand la malignité a la raison de son côté, elle devient fière, et ét étale la raison en tout son lustre. / Quand l'austérité ou le choix sévère n'a pas réussi au vrai bien, et qu'il faut revenir à suivre la nature, elle devient fière par ce retour.)

この断章は、要旨において《邪悪な性質》(la malignité) に関するものであり、そうしてこの邪悪な性質なるものは、人間の墮落した性格を示すものであるから、この fr. は「5. 墮落した本性」の分類項目に所属することになる。

(7) La. 145-Br. 448 について。——《[ミトンは]、人間の本性が墮落しており、人間が誠実とはほど遠い存在であることを、よく知っている。だが、

なぜ人間がもっと遠く飛ぶことができないかは知らない。》[Miton] voit bien que la nature est corrompue et que les hommes sont contraires à l'honnêteté : mais il ne sait pas pourquoi ils ne peuvent voler plus haut.)

この断章の冒頭には、直截に《人間の本性が墮落しておる》(la nature est corrompue) と述べられているので、当然「5. 墮落した本性」のうちに分類しうる。

なおこの断章の末尾の《……人間がもっと遠く飛ぶことができない》(……ils [les hommes] ne peuvent voler plus haut.) という文章は、一見不可解であるが、これは思想的には、fr, La. 301-Br. 426——《真の自然が失われたので、何もかもが人間にとっては自然になった。ちょうど、真の幸福が失われたので、何もかもが人間の真の幸福になったように。》(La vraie nature étant perdue, tout devient sa nature ; comme, le véritable bien étant perdu, tout devient son véritable bien.) と、関連するものである。パスカルの神学的立場からすれば、《真の自然》(la vraie nature) 及び《真の幸福》(le véritable bien) が《失われた》(être perdu(e)) ということは、人間存在の根源的状态に係わるものであり、聖書の神話的表現によれば、アダムとエヴァの原罪とこれに対する神の刑罰とに因ることを、意味するものであって、パスカルの友人《ミトン》(Miton) が考えるごとき、常識的通俗的な意味における人間を墮落視する見方——パスカルの実存論的立場からすれば、日常的頹落の実存の見地——とは、次元を異にするものである。この問題は、人間本性の墮落とこれに対する深刻なる自覚を通して、キリスト教的信仰の立場へと移行する問題を、パスカルは意図しておるのである*。

*この問題の詳細に関しては、拙論 XXIX 回中の「V. 問題への回答」(p. 169—172) を、参照のこと。

(8) La. 166-Br. 359 について。——《わたしたちが道徳的な高さをそのまま維持しているのは、自分自身の力によるのではない。そうではなく、相対

立する二つの悪徳の均衡によるのである。いわば、反対側から吹く二つの風の中間に立っているようなものである。二つの悪徳のうち的一方を取り去ってみるがいい。かならずもう一方の悪徳におちいる。》(Nous ne nous soutenons pas dans la vertu par notre propre force, mais par le contrepoids de deux vices opposés, comme nous demeurons debout entre deux vents contraires: ôtez un de ces vices, nous tombons dans l'autre.)

この断章は、明らかに《悪徳》(vices)のあり方を対象としているので、「5. 墮落した本性」に属することは明らかであるが、文頭で《道徳的な高さ》(la vertu)にも触れているので、第Ⅲ回の分類を訂正して、この fr. を48の「善と悪(美德と悪徳)」の分類項目にも挿入し、「5. 墮落した本性」の項目に、La. 166(48)を入れることにする。

(9) La. 311 (48)-Br. 478 について。——《わたしたちが神について考えようとする、わたしたちを遠ざけ、ほかのことを考えさせようとするのかすものが、何かありはしないだろうか。そういうものすべて、悪であり、わたしたちの持って生まれたものである。》(Quand nous voulons penser à Dieu, n'y a-t-il rien qui nous détourne, nous tente de penser ailleurs? Tout cela est mauvais et né avec nous.)

この断章の末尾には、《そういうものはすべて、悪であり、わたしたちの持って生まれたものである。》(Tout cela est mauvais et né avec nous) という叙述があり、これは言う迄もなく、われわれの墮落した本性を示すものであるから、同名の分類項目たる「5. 墮落した本性」に所属する。他方、この fr. の文頭には、《わたしたちが神について考えようとする……》(……nous voulons penser à Dieu) とする文章があるが、これは神への関心を示す人間の美德の一面に関するものであるから、この断章は「48. 善と悪(美德と悪徳)」の分類項目に入り得ると、言える。

(10) La. 601 (41)-Br. 546 について。——《本性は墮落していること——

イエス・キリストなしには、人間は、悪徳と惨めさの中におちこむより外にない。イエス・キリストと共にあって、人間は、悪徳と惨めさからまぬかれられる。かれのうちにこそ、わたしたちのすべての徳、すべてのさいわいがある。かれをはなれては、ただ、悪徳、惨めさ、誤り、暗黒、死、絶望だけしかない。》(*La nature est corrompue. — Sans Jésus-Christ, il faut que l'homme soit dans le vice et dans la misère ; avec Jésus-Christ, l'homme est exempt de vice et de misère. En lui est toute notre vertu et toute notre félicité. Hors de lui, il n'y a que vice, misère, erreurs, ténèbres, mort, désespoir.*)

この断章のタイトルは、《本性は墮落していること》(*La nature est corrompue.*)であるからして、この断章が「5. 墮落した本性」に所属することは、言う迄もない。

しかし他方において、この fr. は人間の本性の墮落との関連において、《イエス・キリスト》(*Jésus-Christ*) による救済を説いている。従って本断章は、41の「イエス・キリスト」の分類項目にも、入り得ることになる。

(11) La. 609(41)-Br. 440 について。——《理性が墮落していることは、こんなにも多くの種々さまざま、途方もない風習があることによっても明らかである。人間がもはや自分ひとりでは生きることができなくなるために、「真理」が来たりたまわねばならなかった。》(*La corruption de la raison paraît par tant de différentes et extravagantes moeurs. Il a fallu que la vérité soit venue, afin que l'homme ne véquît plus en soi-même.*)

この断章は、《「真理」》(*la vérité*) 即ちイエス・キリストが来なければならなかった程、それほど人間の《理性が墮落していること》(*la corruption de la raison*) を叙しているので、「5. 墮落した本性」の項目に属する。またこの断章は、上述のごとく《「真理」》たるイエスに触れているので、当然「41. イエス・キリスト」の分類項目に入ることになる。

(12) La. 702-Br. 495 について。——《自分が何ものであるかを知ろうとせずに生きることが、超自然的な盲目であるとする、神を信じていながら、正しく生きようとしなないのは、おそろしいほどの盲目である。》(Si c'est un aveuglement surnaturel de vivre sans chercher ce qu'on est, c'en est un terrible de vivre mal, en croyant Dieu.)

この fr. は、人間の《超自然的な盲目》(un aveuglement surnaturel) 及び《神を信じていながら、正しく生きようとしなないのは、おそろしいほどの盲目である。》(c'en est un terrible de vivre mal, en croyant Dieu.) ことを述べて、人間本来の墮落の深刻さに触れているので、分類項目の「5. 墮落した本性」に属することになる。

(13) La. 714-Br. 103 について。——この断章の主要部分のみを抽出すると、次の如くである——《アレキサンダーは、その酒乱ぶりのためにたくさんな大酒飲みを生み出したが、かれが示した純潔さの模範の方は、それほど多くの純潔な人間を生まなかった。それと同じ位高潔な人間ではなくても、恥にはならないが、かれと同じ位不徳な人間であるということは、申しわけの立つことらしい。こんなふうなえらい人の悪徳にあやかっていると、自分は、ふつう一般の人の悪徳にはまるでかわりがないのだと思いこんでしまう。……えらい人たちがどんなに高くそびえていても、なおどこかで、一ばん卑しい人間と結びついている。……えらい人たちが、わたしたちよりえらいのは、頭がちょっと高く出ているというだけのことで、足の方は、わたしたちと同じく低い所にある。……こういう端の方では、えらい人も、わたしたちと同じ位、また、もっとも卑しい者、子供、けだものと同じ位、低い所にいる。》(L'exemple de la chasteté d'Alexandre n'a pas tant fait de continents que celui de son ivrognerie a fait d'intempérants. Il n'est pas honteux de n'être pas aussi vertueux que lui, et il semble excusable de n'être pas plus vicieux que lui. On croit n'être pas tout à fait dans les vices du commun des hommes;quelque élevés qu'ils soient, si sont-ils

unis aux moindres des hommes par quelque endroit.....S'ils sont plus grands que nous, c'est qu'ils ont la tête plus élevée; mais ils ont les pieds aussi bas que les nôtres.....et, par cette extrémité, ils sont aussi abaissés que nous, que les plus petits, que les enfants, que les enfants, que les bêtes.)

この断章の後半の部分には、《……えらい人たちがどんなに高くそびえていても、なおどこかで、一番卑しい人間と結びついている。》(.....quelque élevés qu'ils soient, si sont-ils unis aux moindres des hommes par quelque endroit.) という叙述があり、また本断章の末尾には、《……えらい人も、わたしたちと同じ位、また、もっとも卑しい者、子供、けだものと同じ位、低い所にいる。》(.....ils sont aussi abaissés que nous, que les plus petits, que les enfants, que les bêtes.) という文章がある。これらの叙述は、人間本性の低級さを示すことを意図しており、特に《けだもの》(les bêtes) と同等の低さにあることを、明示している。従ってこの fr. が、「5. 墮落した本性」の項目中に入ることは、自然の理である。

[VII] 6. 想像力——100, 135, 138(7), 207(11).

(1) La. 100-Br. 275 について。——《人間は、単に想像にすぎないものを、本当の気持ととりちがえる場合が多い。そこで回心しようと思いついただけで、はやくも回心したものと思いきむ。》(Les hommes prennent souvent leur imagination pour leur cœur; et ils croient être convertis dès qu'ils pensent à se convertir.)

この断章は、われわれの《想像力》の結果としての、想像作用の一例——われわれにとって教訓的なる——を、掲げているので、分類項目の「6. 想像力」に入る。

(2) La. 135-Br. 85 について。——《たとえば、自分のわずかばかりの

富を隠すなどといったふうなことが、わたしたちの一ぱんの関心事になりがちであるが、そんなことは大ていの場合、つまらないことにすぎない。そんな無にもひとしいことを、わたしたちの想像力が山ほどにも大きく思わせるのである。そんなことは、想像力をちょっと別なふうに働かせてみれば、難なく発見されることである。》(Ces choses qui nous tiennent le plus, comme de cacher son peu de bien, ce n'est souvent presque rien. C'est un néant que notre imagination grossit en montagne. Un autre tour d'imagination nous le fait découvrir sans peine.)

この断章は、《われわれの想像力》(notre imagination)の働き方の特徴を描いておるので、当然乍ら「6. 想像力」の分類項目に属する。

(3) La. 138(7)-Br. 84 について。——《想像力は、一風変わったものの見方によって、ごく小さな物をも、わたしたちのたましいを一ぱいにみたすほど、大きいものにする。また、凶々しく思いあがって、大きいものを、自分の尺度にあうように、小さくする。たとえば、神について語る場合がそうである。》(L'imagination grossit les petits objets jusqu'à en remplir nôtre âme, par une estimation fantasque ; et, par une insolence téméraire, elle amoindrit les grands jusqu'à sa mesure, comme en parlant de Dieu.)

この断章の主旨は、想像力の《一風変わったものの見方》について述べることにある。それゆえ、この fr. は6の「想像力」の項目に入るべきものである。

次にこの断章中では、想像力が小さなものを大きく考え、逆に大きなものを小さく評価することが、述べられているが、この事態は、「不法」と言わざるを得ない。それ故、この fr. はまた、7の「不法なこと」の分類項目に入るべきものである。なぜなら「不法なこと」の一例として、われわれは次の断章を見出すからである——La. 142-Br. 214——《不法なこと——欠けた所ばかりなのに、思い上がりがこれに伴っているのは、実に不法きわまることである。》(Injustice.—Que la présomption soit jointe à la nécessité, c'est une extrême injustice.)

この断章中では、《思い上がり》(la présomption) という語が出て来るが、これは《想像力》と主観的な情意とが、結びついたものであるから、不法な事態と想像力とは、決して無関係ではないのである。

ところでわれわれは、この断章の要旨の《背後の思想》(une pensée derrière la tête)¹⁾ について、簡単に触れておき度い。それは、パスカル自身の宗教経験に基づくものである。即ちパスカルからすれば、神は想像力を絶した、すべてのものの《根原》(le principe)²⁾ である、ということである。

- (1) Voir La. 181-Br. 337—《……人は背後の思想をもたなければならない、そうしてこれによって万事を判断しなければならない……》[拙訳] (……Il faut avoir une pensée de derrière, et juger de tout par là,……)。
- (2) Voir La. 334-Br. 236—《……もし君が真の根源をあがめることができずに死んだならば、君は、損をしたことになる。》(……si vous mourez sans adorer le vrai principe, vous êtes perdu.); La. 390-Br. 72—《……しかしながら、無にいたるのも、全体にまで達するのと劣らぬ能力が必要なのである。どちらの場合にも無限の能力が必要である。わたしには、物事の最終的な原理を理解した人こそ、無限を知ることが可能になるのだと思える。この二つは互いに関係があり、どちらか一方が他方への道をつける。この二つの極端は遠くへだたり合っているからこそ、互いにふれ合い、互いに結び合う。神において、ただ神においてのみ、互いに会おう。》(……cependant il ne faut pas moins de capacité pour aller jusqu'au néant que jusqu'au tout; il la faut infinie pour l'un et l'autre; et il me semble que qui aurait compris les derniers principes des choses pourrait aussi arriver jusqu'à connaître l'infini. L'un dépend de l'autre, et l'un conduit à l'autre. Ces extrémités se touchent et se réunissent à force de s'être éloignées et se retrouvent en Dieu, et en Dieu seulement.)

(4) La. 207(11)-Br. 304 について。——《……ところで、そういう階級が形成されるようになる様子を今わたしたちが見ているのだと仮定しよう。かならず強い方の側が弱い側を圧倒し、ついに支配的な一党派ができるまで、戦いがつづくことであろう。しかし、一たび万事に決着がつくと、支配者たちは、いつまでも戦いがつづくことを望まず、自分の手中にある力が、自分たち

の思いどおりに受けつがれて行くような制度を定める。人民投票にそれをゆだねる者もあれば、世襲制にゆだねる者もある。／さてここから、想像力がその役割を果たしはじめる。これまでは、力そのものがその役目を果たしてきた。これからは、想像力が、一定の党派に力を維持させる支えになる。たとえば、フランスでは、貴族階級、スイスでは平民階級が力を保つ。／ところで、何のなにがしという特定の個人に尊敬をつなぐ綱は、想像力による綱である。》(……
Figurons nous donc que nous les [degrés] voyons commençant à se former. Il est sans doute qu'ils se battront jusqu'à ce que la plus forte partie opprime la plus faible, et qu'enfin il y ait un parti dominant. Mais quand cela est une fois déterminé, alors les maîtres, qui ne veulent pas que la guerre continue, ordonnent que la force qui est entre leurs mains succédera comme il leur plaît; les uns la remettent à l'élection des peuples, les autres à la succession de naissance, etc. / Et c'est là où l'imagination commence à jouer son rôle. Jusque-là la pure force le fait: ici c'est la force qui se tient par l'imagination en un certain parti, en France des gentilshommes, en Suisse des roturiers, etc. / Or ces cordes qui attachent donc le respect à tel ou tel en particulier, sont des cordes d'imagination.)

以上の文章は、主要部分の引用であるが、この断章の後半の部分には、《想像力》(l'imagination)の役割(son rôle)が、個人と個人とをつなぎ、党派・階級を構成維持するものであることが、述べられている。この fr. が、「6. 想像力」の項目に、分類配属される所以である。

またこの断章では、《la force》なる語が3個処で用いられ、その外《dominer》、《ils se battront》、《la plus forte partie》、《la plus faible[partie]》、《un parti dominant》、《les maîtres》、《la guerre》等、《la force》と関係のある語が、多数出て来るので、11の「力」の分類項目にも入りうるものが、理解される。

(XXXVII 回了)